〔論　　文〕

幼児の自己主張性と遊びの嗜好との関連

Relationship between Degrees of Self-Assertion
and Preference of Play in Preschool Children

藤　田　　文
Fujita Aya

Abstract

The purpose of this study was to investigate the relationship the degree of self- assertion and the preference of play in preschool children. The subjects were 30 3-year-old, 56 4-year-old, 58 5-year-old preschool children. First they were asked about their preference of play. They were showed the pictures of four kinds of play, including two kinds of active and non active play and two kinds of individual play and group play. They were asked to arrange them to a favorite order. Next they were asked whether they assert to their peer in the conflict situation or not. The main results showed that the children of high self-assertion group preferred ONIGOKKO more than those of low self-assertion group and the children of low self-assertion group preferred NAWATOBI more than those of high self-assertion group. But the relationship between the preference of their active play and the degree of self-assertion was not found. These findings suggested that the group play was important to develop the self-assertion abilities.

Key words: self - assertion, preference of play, preschool children

〖問題と目的〗

幼児期の仲間関係の発達研究において自己制御能力が注目されている。自己制御能力とは、自己の欲求や意志に基づいて自発的に行動を調整する能力と定義され（Thorensen & Mahoney, 1974, 新名, 1991)、これには二側面があるととらえられている。自分の欲求や意志を明確にもち、これを他人や集団の前で表現し主張する「自己主張的側面」と、集団場面で自分の欲求や意志を抑制・制止しなければならない時、これを抑制する「自己抑制的側面」である（柏木, 1988)。

近年、自己制御能力と実際の仲間との相互作用の関連が検討されてきている。友川ら（1999）は、3歳児から5歳児を対象に共同作業場面で自己主張的側面と自己抑制的側面がどのように機能しているかについて検討した。その結果、自己主張性の高いタイプの幼児たちが共同作業場面で発話数や行動数が多く、自己主張的側面が相互作用と関連が強いことが示唆された。また、藤田（2003）は、4歳児と5歳児を対象に魚釣りゲーム場面での交代行動の発達を検討した。その結果、幼児の仲間関係の中で交代行動をうまく行っていくためには、単に自己抑制し

ていくだけでなく、自分の順番を主張するなどの自己主張性が重要な要因となることが示唆された。これらの研究から、幼児期の自己主張性に注目する必要があることが示された。そこで、本研究でも幼児の仲間関係の調整を自己主張性の側面から検討していくことにする。

幼児の自己主張性に関する従来の研究では、自己主張性は向社会的行動と密接に関連しており、主張性が高いと自発的に援助や分配などを行い、他者との関わりを好んでいること（伊藤ら，1999；Eisenberg et al., 1981)、また同様に、友達に対する指示的言動が多い主張的な幼児は、仲間との遊び場面で向社会的行動を多く行うことも明らかにされている（Barrett & Yarrow, 1997)。つまり、自己主張性は、自発的に他者に近づいたり援助を申し出たりするのに必要な社会的能力であることが示唆される。このような自己主張性は、仲間関係を調整する上で重要であるが、逆に言えば、そのような仲間関係を経験することでしかその能力が獲得されないとも考えられる。

しかし、現代の子どもたちの特徴として、対人関係の希薄化（丸山，1999）や外遊び時間の減少（仙田，1992）が指摘されており、子どもたちが自己主張性を獲得する機会が減少していることが危惧される。近年の少子化現象が、同年代の仲間との対人葛藤経験を希薄なものとしていることもあるだろう。幼稚園や保育園に入園するまで、同年代の仲間との関わりの経験がほとんどない子どもも存在している。大人との遊びや一人遊びでは楽しめても、集団での遊びが楽しめずに入園後もそのような遊びを好まない場合も考えられる。

仙田（1992）は、環境建築家の立場から子どもの遊び空間に関する調査を行った。1970年と1989年の横浜市の児童公園の実態調査では、1970年に比べて1989年は公園の利用者数は半数になっており、公園の利用時間は平均20分減少していることが明らかになった。また、全国規模の環境調査では、1965年ごろから次第に家の中での遊び時間が長くなり、1973年ごろから80年ごろには、すでに外遊びの時間よりも室内遊びの時間の方が多くなっていることが示された。さらに1989年の横浜での調査では、子どもたちは外で遊ぶ時間よりも家の中で遊ぶ時間の方が4倍も多いという結果が得られた。つまり、9歳以下の子どもたちの戸外での遊びが減少していることが示されている。仙田は、この結果を外遊びの空間がなくなっていることが最大の要因であると解釈している。現代の子どもたちは、遊び場が減りたまり場を失ったため、集団が小さくなり、年長児から年少児への遊びの伝達もできなくなり、遊び方法が貧困化し、遊びの意欲が減少し、外遊びの時間がさらに減少していくという悪循環となっていることを指摘している。

これらのことから、対人関係の希薄化や外遊びの減少は、集団遊びの減少につながっていると考えられる。従来の研究では、一人遊びは必ずしもレベルの低い低年齢児の遊びというわけではなく、遊びの一つの好みであるととらえられている（氏家，1982)。従って、一人遊びを好むことが必ずしも発達レベルが低いことにはならないという考え方もできる。しかし、一人遊びを好むために、集団遊びの経験が少なくなることが、その後の自己主張性などの社会性の発達にマイナスの影響を与える可能性は否定できない。従って、幼児の自己主張性と一人遊びや集団遊びの嗜好について、その関連を明らかにしておく必要があると考えられる。

また、自己主張性の獲得には集団遊び経験以外の遊びの要因も影響しているのではないかと考えられる。前述したように自己主張性は、自己の欲求や意思を他人や集団の前で表現する能力である。従って、自己の内的なものを身体的に表現するという経験も何らかの影響を与えている可能性がある。例えば活発な運動遊びは、内的なエネルギーを身体的に外に表出するという点では、自己主張性と類似した部分があるのではないだろうか。この点から考えると、外遊

びの減少は、活発な身体表現的遊びの減少も示しており、また違った意味で自己主張性の発達に影響を及ぼしているともいえよう。したがって、幼児の自己主張性と活発な運動遊びの嗜好との関連も検討していく必要があるだろう。しかし、幼児の遊び場面における自己主張性に関する研究は多くなされているものの、これまでに自己主張性と遊びの嗜好の関連については検討されていない。

そこで本研究では、自己主張の程度は遊びの嗜好と関連があるかどうかを検討する。まず、遊びの人数についての嗜好に焦点を当てる。主張性が高い子は積極的に他者と関わることを好んでいるため、遊び場面でも集団遊びを好むのではないかと考えられる。そして、ますます自己主張能力が高められていくのではないだろうか。一方主張性の低い子は、他者との関わり合いを避けるため一人遊びを好むのではないかと予想される。そのことにより、自分の殻に閉じこもるのでますます自己主張能力低下につながり悪循環を繰り返す可能性があるだろう。

次に、遊びの活発度についての嗜好に焦点を当てる。ここでは、外遊びなどの走り回ったり身体を動かす遊びが活発度が高いととらえる。主張性が高い子は言語的な面だけでなく、身体的な面でも外的に表現する程度が高いため、活発な遊びを好むのではないかと考えられる。一方主張性の低い子は、身体的な面でも抑制的であるため、活発な遊びは好まないのではないかと予想される。

以上のことから本研究は、自己主張性の高い子は集団遊びを好むのかどうか、また、自己主張性の高い子は活発な遊びを好むのかどうか、この2点を明らかにすることを目的とする。

〖方　　法〗

被験者：本研究の被験者は、O市内の幼稚園3歳児クラスの男児16名と女児14名（平均年齢4.0歳）、4歳児クラスの男児29名と女児27名（平均年齢5.0歳）、5歳児クラスの男児29名と女児29名（平均年齢6.0歳）の計131名だった。

手続き：被験者の遊びの嗜好と自己主張の程度を調べるために、幼稚園の一室で個別調査を実施した。調査時間は1人につき10分程度だった。

(1) 遊びの嗜好に関する質問

被験者の遊びの嗜好を調べるために、遊びを絵で示した図版を作成した。遊びの種類は幼児が日常生活でよく遊んでいると考えられるものを選択した。また、遊びの運動量によって動的遊びと静的遊びを選択し、遊びの人数によって一人遊びと集団遊びを選択し、その組み合わせで4種類とした。それぞれ男児の絵を描いた男児用図版と女児の絵を描いた女児用図版を作成した（付録参照）。その具体的な種類を表1に示した。静的な遊びの集団遊びは、男児・女児の両方に共通する遊びが少なく、今回は男児と女児で異なるものを設定した。

これらの4枚の絵を被験者に見せ、4種類の遊びから好きな順に順位をつけてもらった。まず実験者が、「今から○○ちゃん（君）の遊びのことを聞くね。」と教示し、4枚の絵を提示し、絵の内容を1枚ごとに「これは一人でおえかきをしている絵です。」「これはみんなでカードゲームをしている絵です（男の子）。」「これはみんなでおままごとをしている絵です（女の子）。」「これは一人でなわとびをしている絵です。」「これはみんなでおにごっこをしている絵です。」と説明した。次に、「この中で○○ちゃん（君）が一番好きな遊びはどれかな。」と質問し、好

きな絵を１枚選んでもらった。残った３枚もこの要領で質問し、１～４枚の順位をつけてもらった。この時、４種類の遊びの提示順序は被験者ごとにランダムにした。

表1　遊びの種類

遊びの種類		男　児	女　児
動的遊び	一人遊び	なわとび	なわとび
	集団遊び	おにごっこ	おにごっこ
静的遊び	一人遊び	おえかき	おえかき
	集団遊び	カードゲーム	おままごと

(2)　自己主張性に関する質問

被験者の自己主張の程度を調べるために、伊藤ら（1999）で用いられた自己主張認知評定項目を参考に質問項目を作成した。この項目は、幼稚園での日常生活における幼児の行動を反映させやすい場面になっていた。伊藤らの項目の中で、仲間との葛藤が不明確であるものを除き、遊具を返してほしいという主張場面とルール違反に対する主張場面を加えて６項目を作成した。表２に具体的な質問項目を示した。質問項目は図版とお話によって、ランダムな順序で提示された。図版の中に登場する○○ちゃん（君）は被験者自身とし、登場人物の性別により男児用図版と女児用図版を作成した（付録参照）。

質問手順は以下の通りであった。まず実験者が、「これから、○○ちゃん（君）がお友達とどんな風に遊んでいるのか聞くね。いつもどうしているか考えて答えてね。」と教示し、遊び場面が描かれた図版を提示した。たとえば、質問項目１のおにごっこ場面では、「近くでお友達がおにごっこをしています。○○ちゃん（君）もおにごっこをしたいと思いました。その時○○ちゃん（君）は『仲間に入れて』と言いますか？それとも言いませんか？」と質問した。そして、被験者にその場面で主張している図版と主張していない図版を提示し、２つの図版のうちどちらか一方の図版を選択するように求めた。さらに、選択された回答に関して、「○○ちゃん（君）はいつもそうするかな、時々そうするかな。」と質問し、その程度を大小の丸で表した図版を提示し、どちらかを指でさすように教示した。大きい丸がいつもそうすること、小さい丸が時々そうすることを示していると説明を加えた。つまり、自己主張の程度が４段階で評定されるようになっていた。自己主張をいつもする場合を４点、時々する場合を３点、時々主張しない場合を２点、いつも主張しない場合を１点とし、６場面での点数を合計して、自己主張性得点とした。

表２　自己主張性を測定する６場面

場面１仲間入り	おにごっこに仲間入りするときに「入れて」といえる。
場面２遊具の借用	友達が使っているスコップを「貸して」と言える。
場面３悪口への反発	お絵描きをしていて、友達に「変な絵」と言われた時、怒りを表現する。
場面４遊具の返却要求	友達にブロックをとられた時「返して」と言える。
場面５考えの提案	積み木でどんなお城を作ろうか話し合っている時に自分のアイディアを話す。
場面６ルール違反の指摘	ブランコで友達が順番抜かしをした時「ズルイ」と言える。

〖結　　果〗

(1)　年齢別自己主張得点

自己主張性に関する質問の６場面の合計点を算出し、年齢別・性別で比較した。その結果を図１に示した。図１のデータに基づき、３年齢（３歳・４歳・５歳）×２性別（男児・女児）の分散分析を行った。その結果、年齢の主効果に有意差がみられた（$F(2,138)=5.89, p<.01$）。下位検定の結果、３歳児と４歳児の間（$p<.05$）、４歳児と５歳児の間（$p<.05$）に有意差がみられた。このことから、主張得点は３歳児から４歳児にかけて上昇するが、４歳児から５歳児にかけて下降するということが明らかになった。また、年齢×性別の交互作用にも有意差がみられた（$F(2,138)=4.30, p<.05$）。下位検定の結果、４歳男児と３歳男児、４歳男児と３歳女児、４歳男児と５歳男児の間にそれぞれ有意差がみられた（すべて$p<.05$）。このことから、４歳男児の自己主張得点が３歳児と５歳男児よりも高いことが明らかになった。

以上のことから、自己主張得点には年齢差がみられることが示された。従って、各年齢で自己主張の高い幼児と低い幼児では得点分布が異なることが明らかになった。

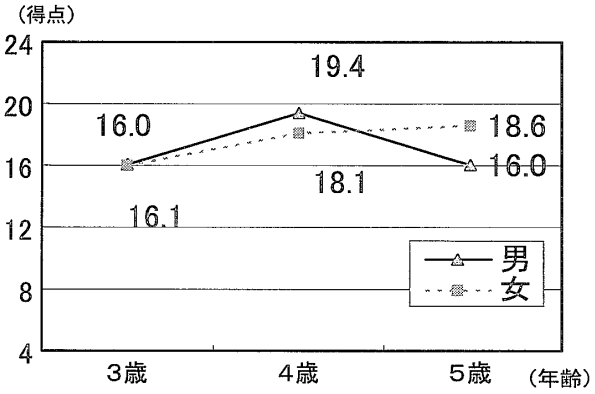


図１　年齢・性別の自己主張得点

(2)　自己主張の程度と遊び人数の嗜好との関連

被験者を自己主張性の得点によって分類した。年齢ごとに自己主張得点の高い方から10名を自己主張高群、低い方から10名を自己主張低群として分析対象とした。次に、各群の遊びの嗜好の順位を逆転して得点化した。１番好きだとした遊びを４点、最も嫌いだとした遊びを１点とし、得点が高いほどその遊びが好きであることを意味するようにした。そして、一人遊びの２種類と集団遊びの２種類の得点をそれぞれ合計した。一人遊びはなわとびとお絵描き、集団遊びはおにごっことカードゲームまたはおままごとである。

年齢別の各群の遊び嗜好の得点を図２から図４に示した。３歳から５歳をまとめて、自己主張高群と低群の遊びの嗜好得点を比較し、マンホイットニーのＵ検定を行った。その結果、遊びの人数には有意差は見られなかった。図からは、全体的に自己主張高群は低群よりも集団遊びを嗜好し、自己主張低群は高群よりも一人遊びを嗜好している傾向は認められるが、有意な差とはいえないことが明らかになった。

そこで、遊びごとに別々に同様の検定を行った。その結果、なわとびで有意差（$z=1.97, p<.05$）がみられ、おにごっこで有意な傾向（$z=1.95, p<.10$）が示された（図５参照）。従って、自己主張高群は低群よりもおにごっこを嗜好し、低群は高群よりもなわとびを嗜好することが明らかになった。以上のことから、自己主張性と遊びの人数の嗜好は非常に部分的であるが、関連がみられることが示された。

また、性別に遊びの嗜好得点を比較し、同様の検定を行った。その結果、有意な性差が見られ、女児は男児よりも一人遊びを嗜好し（$z=4.71, p<.01$）、男児は女児よりも集団遊びを嗜好する（$z=4.88, p<.01$）ことが明らかになった（図６参照）。

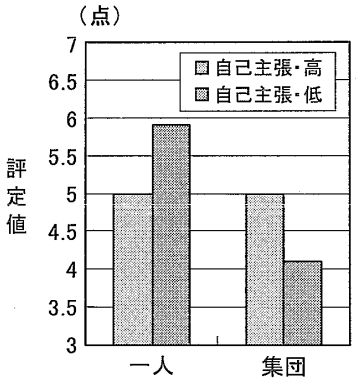


図２　３歳児の自己主張と一人・集団遊び嗜好性の関連

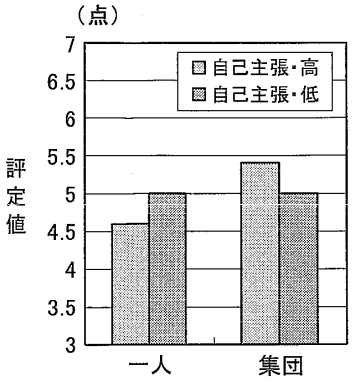


図３　４歳児の自己主張と一人・集団遊び嗜好性の関連

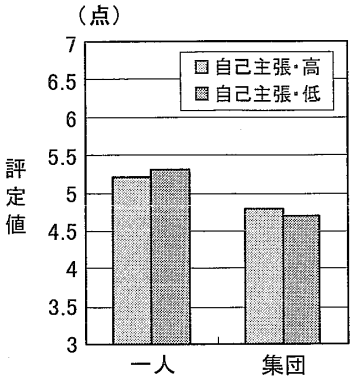


図４　５歳児の自己主張と一人・集団遊び嗜好性の関連

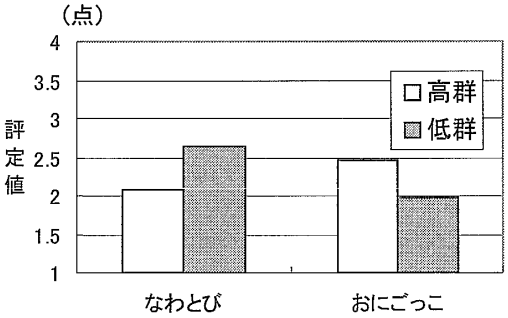


図５　自己主張性による遊びの嗜好性の違い

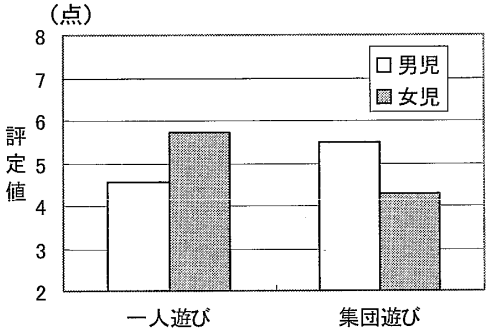


図６　性別による遊びの嗜好性の違い

(3)　自己主張の程度と遊び活発度の嗜好との関連

結果(2)と同様に、各年齢で自己主張得点の高い方から10名と低い方から10名を抽出し、被験者を自己主張高群と低群に分類して、遊びの活発度の嗜好との関連を検討した。動的遊びの２種類と静的遊びの２種類の得点をそれぞれ合計した。動的遊びはおにごっことなわとび、静的遊びはおえかきとカードゲームまたはおにごっこである。

年齢別の各群の遊びの嗜好の得点を図７から図９に示した。３歳から５歳をまとめて、自己主張性高群と低群の遊びの嗜好得点を比較し、マンホイットニーのU検定を行った。その結果、有意差は見られなかった。従って、自己主張性と遊びの活発度の嗜好の関連はみられないことが明らかになった。図からも、３歳児では、自己主張高群が低群よりも動的な遊びを好んでいるが、４歳児と５歳児ではその関連はほとんど見られず、むしろ自己主張高群は低群よりも静的な遊びを好むという逆の傾向を示していた。このことからも、自己主張性という人間関係の側面と遊びの活発度という身体的な側面は加齢に伴いますます関連がなくなっていくということが示された。

また、性別に遊びの嗜好得点を比較し、同様の検定を行った。その結果、有意な性差は見られなかった。活発な遊びを好むかどうかは男女で違いが見られないことが示された。全体的に静的遊びが好まれていることが特徴的であった。

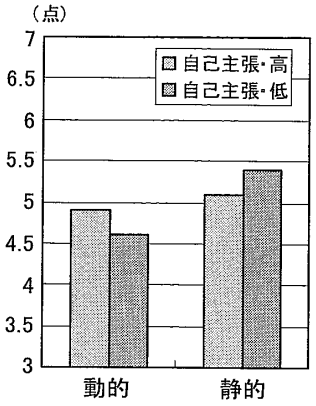


図７　３歳児の自己主張と遊びの活発嗜好性の関連

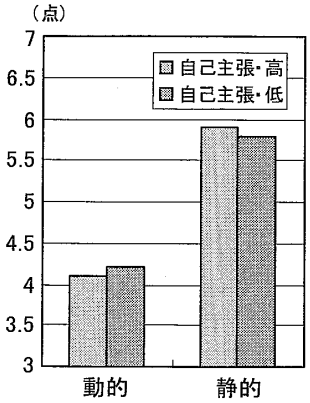


図８　４歳児の自己主張と遊びの活発嗜好性の関連

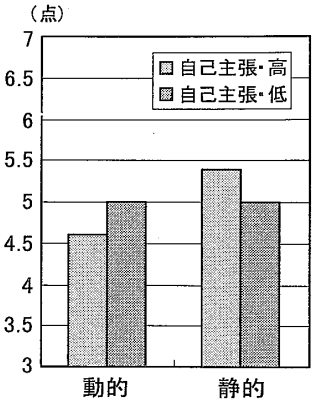


図９　５歳児の自己主張と遊びの活発嗜好性の関連

(4)　遊び別の嗜好の傾向

自己主張性と遊びの嗜好との明確な関連は全体的には見られなかった。そこで、幼児期の全体的な遊びの嗜好の傾向を検討するために、年齢別男女別で各遊びの嗜好得点の比較を行った。その結果を図10・11に示した。図から、全体的に男女ともおえかきの嗜好が高く、おにごっこの嗜好は低いことが示された。男児では、カードゲームが最も嗜好が高く、おえかきは加齢に伴い嗜好が低下する点が特徴的であった。また、女児では、おえかきがもっとも嗜好が高く、おままごとは３・４歳児と比べ５歳児で極端に嗜好が低下する点が特徴的であった。

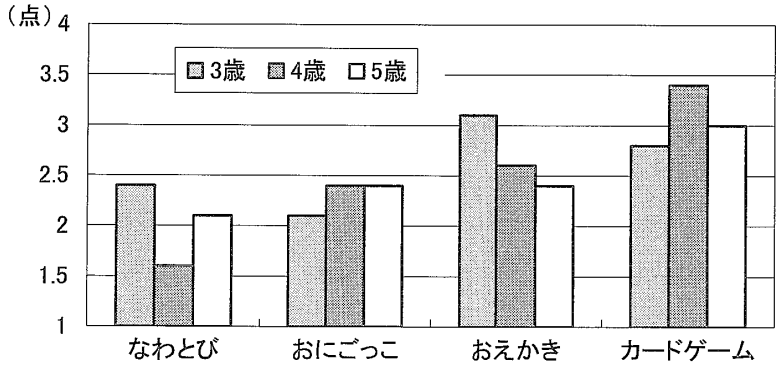


図10　男児の遊び別の嗜好性の傾向

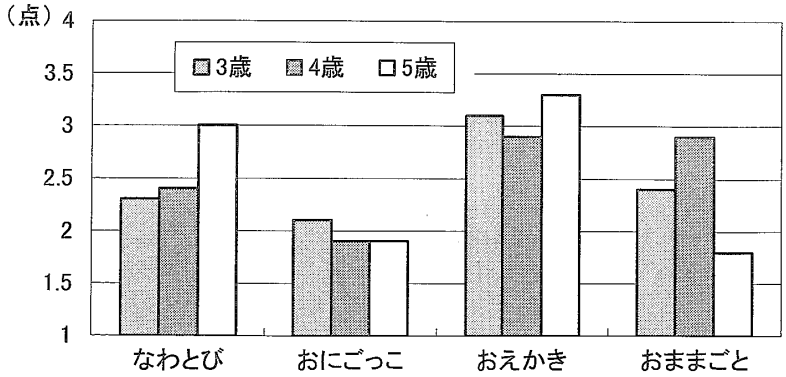


図11　女児の遊び別の嗜好性の傾向

〔考　察〕

本研究の目的は、幼児の自己主張性と遊びの嗜好とに関連があるかどうかを検討することであった。特に、遊びの人数と活発度に着目し、自己主張性の高い幼児は集団遊びを好むのかどうか、また、自己主張性の高い幼児は活発な遊びを好むのかどうか、この2点を明らかにすることを目的とした。

まず、自己主張性と遊びの人数の嗜好との関連について分析した。数値的には自己主張性高群の方が低群よりも集団遊びを好み、低群の方が一人遊びを好むという傾向は見られたものの、有意な結果は得られなかった。しかし、遊び別の分析では、自己主張性高群はおにごっこ遊びを好んでおり、自己主張低群はなわとびを好んでいることが示された。従って、自己主張性と遊びの人数の嗜好は部分的に関連が見られたといえよう。自己主張の高い幼児は、積極的に他者と関わることを好んでおり、遊び場面でもおにごっこのような集団遊びを好む傾向にある。

このことから、自己主張性が高い幼児は他者との関係の中で、自分の欲求や要求を相手に伝えることができるために、集団の状況で満足できるのではないかと考えられる。一方、自己主張性の低い幼児は、他者との関係の中で自己の要求を表現しないことから、集団の状況での満足度が低く、遊び場面ではなわとびのような一人遊びを好む傾向にあると考えられる。このようにして自己主張性の高い幼児は、集団遊びを好むため集団での経験が多くなり、ますます、自己主張能力を発達させることができるが、自己主張性の低い幼児は他者との関わりを避け、自分の殻に閉じこもるのでますます自己主張能力の低下につながり悪循環を繰り返す可能性があることが示唆された。

しかし、あくまでそれぞれ一種類の遊びでのみ見られた部分的な結果であることは考慮する必要があるだろう。本研究で他の遊びで自己主張性による違いが見られなかった原因は、カードゲームとおえかきがどの幼児にも非常に好まれていたということである。特に、男児においてカードゲームは非常に流行しており、多くの幼児が好んでいた。そのため、自己主張性の影響が小さくなったと考えられる。このことは、男児が集団遊びを好み女児が一人遊びを好んでいるという性差の結果にも如実に反映されている。男児のカードゲームの人気と女児のおえかきの人気がそのままこの結果に当てはまるからである。

また、幼児がおえかきを一人遊びとして認識していなかった可能性も原因として指摘される。実験者はおえかきは一人遊びとしており、図版でも一人でおえかきをしている様子を示し、教示でも一人で遊んでいることを強調しているが、幼児にとっては一人ぼっちでおえかきをする状況というよりは、友人と一緒におえかきをしている状況が思い浮かんだ可能性も否定できない。幼児が対象であるので、それほど多くの種類の遊びを順序づけることは困難であるが、今後は遊びの種類をある程度増やして、自己主張性と遊びの嗜好の関連を性差も含めて再検討する必要があるだろう。

次に、自己主張性と遊びの活発度の嗜好との関連について分析した。その結果、まったく関連が見られなかった。3歳児では、自己主張高群の方が低群よりも動的遊びを好み、自己主張低群が高群よりも静的遊びを好むという違いはやや見られたものの有意な結果ではなく、4、5歳児では自己主張性による違いは見られなかった。このことから、自己主張性という人間関係の側面と遊びの活発度の嗜好という身体的側面の関連は弱いということが示された。3歳児では自己主張能力は言語的な面と、身体的な面でも外的に表現する点でやや関連している部分

があるかもしれないが、加齢に伴いその関連は小さくなり、人間関係における言語的な主張性と身体的な表現とは異なる側面として発達していくのではないだろうか。つまり、４・５歳児の人間関係における自己主張能力が、突発的な身体的表現ではなくより複雑な認知過程を経たものになっている可能性が示唆される。

以上のように、対人関係を調整する自己主張性と集団遊びの嗜好に部分的な関連がみられたことから、集団遊びの経験が対人能力の発達に重要であることが示唆された。しかし、遊びの嗜好の特徴を全体的にみると、静的遊びが好まれる傾向にあった。これは、従来の研究の外遊びの減少と関連していると考えられる。これを結論づけるにはより大規模な遊びの嗜好の調査が必要ではあるが、幼児の社会性の発達を促進するためには、集団遊びの経験をどのように増やしていくのかが今後の課題となっていくといえるだろう。

〖引用文献〗

Barrett,D.E. & Yarrow,M.R. 1997 Prosocial behavior, social inferential ability, and assertiveness in children. *Child Development*, 48, 475－481.

Eisenberg,N., Cameron,E., Tryon,K., & Dodez,R. 1981 Socialization of prosocial behavior in the preschool classroom. *Developmental Psychology*, 17, 773－782.

藤田　文　2003　幼児の三者関係における交代行動　日本教育心理学会第45回大会発表論文集, 20.

伊藤順子・丸山（山本）愛子・山崎　晃　1999　幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連　教育心理学研究, 47, 160－169.

柏木恵子　1988　幼児期における「自己」の発達　東京大学出版会

丸山（山本）愛子　1999　対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達的研究　教育心理学研究, 47, 451－461.

新名里恵　1991　社会的行動の発達　古畑和孝(編)子どもの自己制御の発達　学芸図書　71－94.

仙田　満　1992　子どもとあそび　岩波新書

高橋たまき・中沢和子・森上史朗　1996　遊びの発達学（展開編）　培風館

Thorensen,C. & Mahoney, M. J. 1974 Behavioral self-control. New York : Holt. Riehart & Winston.

友川歩美・山田麻美子　1999　共同作業場面における幼児の行動調整機能について　大分大学教育学部幼児学科・幼年教育コース第24回卒業論文抄録, 22, 26－30.

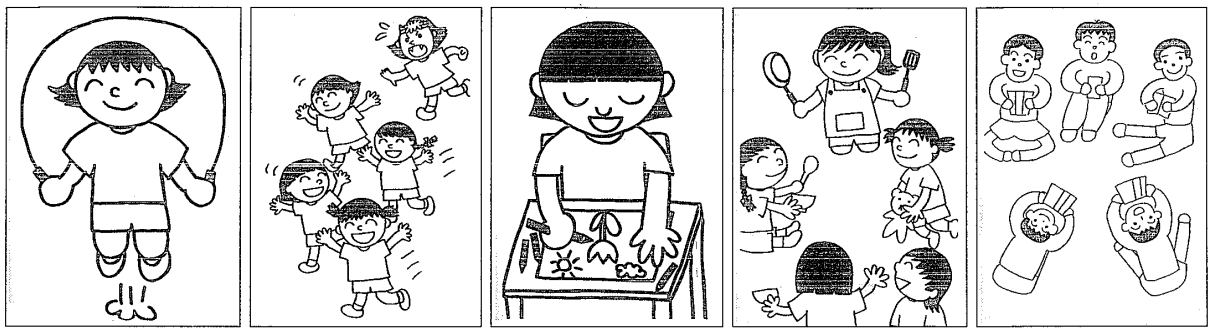
氏家達夫　1982　4－6歳幼児の社会的相互交渉についての研究　北海道大学教育学部紀要,40, 89－103.

〖謝　　辞〗

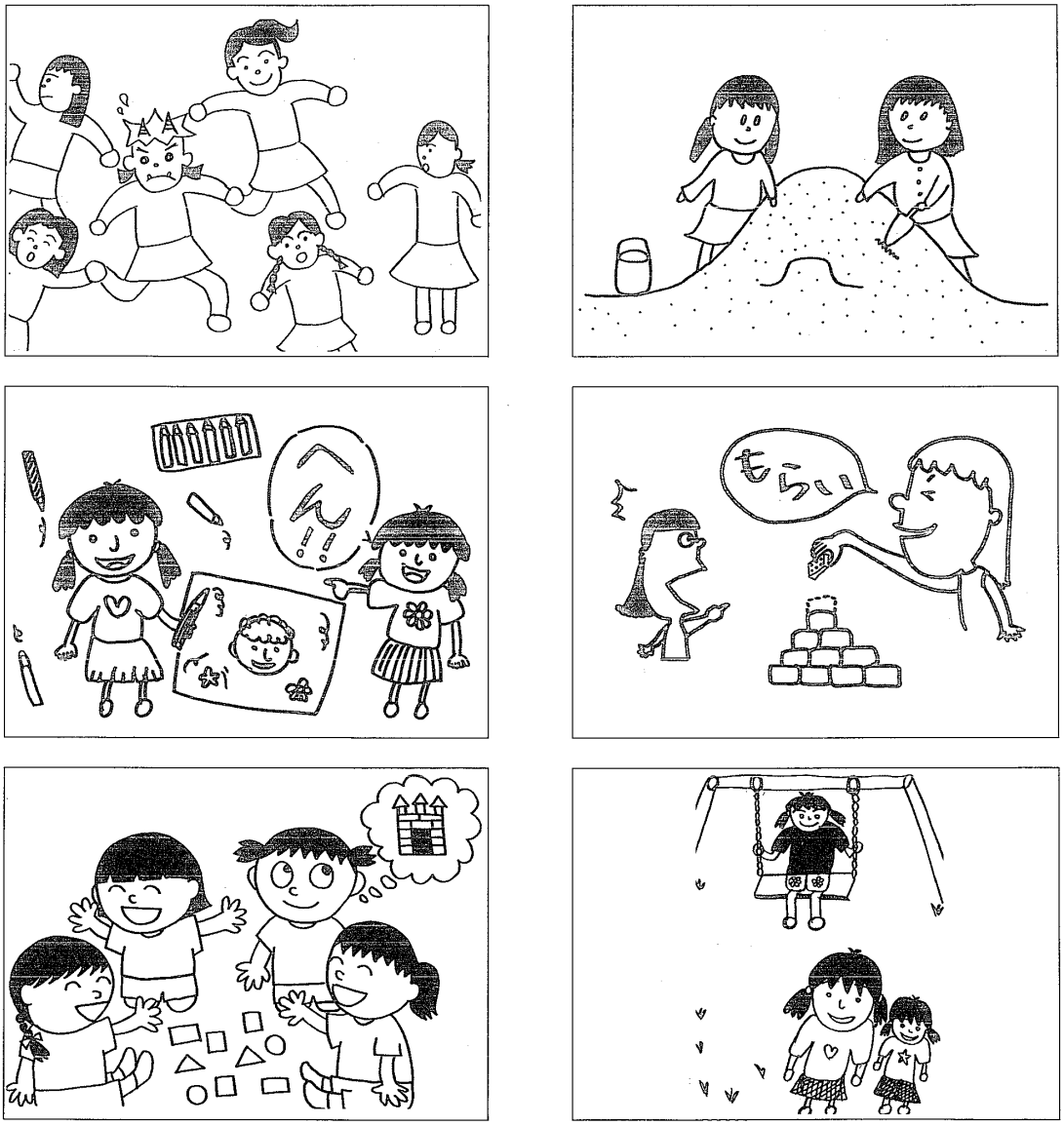
本研究の実験および調査には、O市内の幼稚園の諸先生方ならびに園児の皆さんにご協力いただきました。また、本研究をまとめるにあたり、大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科平成16年度卒業生河野加奈さんと西村友里さんにご協力いただきました。ここに記して心より御礼申し上げます。

本研究の一部は、九州心理学会第66回大会において発表された。また、本研究は平成17年度文部科学省科学研究費基盤研究(C)課題番号17530498の補助を受けた。

【付　　録】



遊び嗜好測定用図版例



自己主張性測定用図版例（女児用）